

令和五年度 専修学校山梨予備校 入学式 あいさつ

山々の緑が目には鮮やかに感じられる、爽やかな季節となりました。本日皆さんを山梨予備校にお迎えするにあたり教職員を代表してごあいさつ申し上げます。皆さん、ようこそ山梨予備校に入学してくださいました。私たち教職員は、皆さんと共にこれからの日々を歩んでいけることをたいへん光栄に思っています。

皆さんは、できれば予備校には入学したくなかった、自分は人に遅れをとってしまったのではないか、また再び同じことをしなければならぬのか、と人生の足踏みをしている感じがあるかもしれません。しかし予備校で過ごす時間について、ありきたりの人生の語り方で判断を下すことは避けてほしいと思います。

人生の充実した時間はそこに至るひたすら努力する過程があつてはじめてその先に実現するかのようですが、本来その努力の過程こそが真に充実した時間なのだとは私は考えます。人生に足踏みなどありません。その時は無駄に思えてもあとから振り返った時、かけがえのない大切な時間だったことに気づくのです。

本日は私から皆さんへのお願いを三点申し上げます。「三つのお願い」です。一つ目は、今の自分に誇りをもってください、ということです。おかれた状況は様々でも全員が予備校で頑張ろうとこの場に臨んでいます。目の前のことに頑張ろうとする自分、その自分を誇りに思う気持ちは人生を必ず支えてくれます。

二つ目は、自分は自分という覚悟をもってください、ということです。人は人。友だちは大学生活を楽しんでいる、などと、人との単純な比較は無用です。何を比較するのでしょうか。予備校で過ごす時間は人生における一年という時間の長さでなく人生の質が変わるのです。自分は自分の時間を生きるだけです。

三つ目は、自分を信じてください、ということです。一度は希望が叶わなくてもその失意の中から立ち上がってくるのが底力です。自分自身のことには自分が一番よく知っている、しかしその自分でも気づけない底力が自分にはあるのです。私たちを現に今、生かし支えてくれる、そういう力の存在を信じてください。

今から五十一年前、一九七二年日本レコード大賞は苗字も名前もひらがなの、ちあきなおみさんが唄う「喝采」という歌でした。大流行でしたが、私はその五年前にプチ流行した「四つのお願い」という歌の方が忘れられません。そのため「三つのお願い」では物足りず、あと一つここで緊急に追加させていただきます。

緊急に、と言いつつも実は用意してあります。受験勉強は大学合格を目的に、その手段としてするものではありません。勉強とは目的も手段も関係なく、生きることそのもの、日常生活そのものです。そこで四つ目のお願いは、自分を忘れて没頭してください、ということ。全ての不安はポケットにしまい、無心で取り組むのです。

ここまで、自分に誇りを、自分は自分という覚悟を、そして自分を信じる、自分、自分、自分と続いて最後は自分を忘れて、でした。矛盾を感じられたかもしれません。今を精一杯生きる、その果てにいつの間にか大学で学んでいる自分がない、自分という意識が出たり引つ込んだり、この繰り返しだが人生の本当の姿なのではないでしょうか。山梨予備校でのこれからの毎日の生活が、皆さん一人一人の人生におけるかけがえのない大切な時間となることを心から願っています。

令和五年四月十四日

山梨予備校 校長 斉木 邦彦